

森いたる＝作

ぼくたちの大事件

渡辺有一＝絵



ゆうびんばこに入れておいてくれば、わたしから
おばあさんにおとどけします。
お花の店 ピース 久子

森いたる=作

ぼくたちの大事件

渡辺有一=絵



NDC●913

みんなの文学=13

174P/22cm

書名●ぼくたちの大事件

作者●森いたる©

画家●渡辺有一

発行●株式会社金の星社

〒111 東京都台東区小島1-4-3

電話・03(861)1861

振替・東京0-64678

印刷●平河工業社

製本●東京美術紙工

初版発行●1983年9月

ISBN4-323-00528-8

Printed in Japan

乱丁落丁本は、二面倒ですが小社営業部宛ご送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

はじめに

おばあさんの なくした

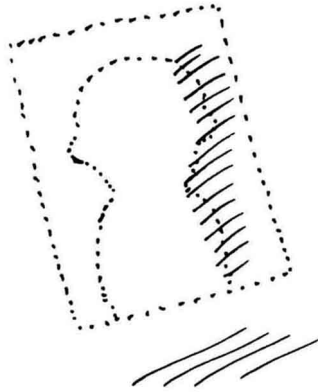
一枚まいきりの 子こどもの写しゃ真しん。

それには、悲かなしい思おもい出でが

秘ひめられていた。

ぼくとチャコは、

写しゃ真しんのゆくえを追おって……。



● 一枚の写真 / もくじ

美術展のできごと 7

たいせつな写真 23

おばあさんの秘密 38

朝井さんのよろこび 53

運がわるい 65

差出人のない手紙 76

お見舞いごっこ 90

思いがけない旅 109



ふしぎなクレヨン画が

121

疎開^{そかい}もできずに

139

むくわれたまごころ

156

あとがき

172



ぼくたちの大事件

森いたる 作

渡辺有一 絵



1 美術展のできごと



夏休みがおわってまもなく、ある日曜日のことだった。

いつものことながら、髪はくしやくしや、ねむたそうな顔で二階からおりてきた朝井さんが、

「純ちゃん、見てくれたか？」

と、きいた。

「えっ、なんだっけ？」

ぼくが、きよとんとすると、

「なんだっけじゃないよ。」

朝井あさいさんは、うらめしそうな顔かおをした。

「やつと、われわれの美術展びじゆてんがはじまったんだ。」

「へえ、よかったね。ちつとも知らなかつた。」

ほんとうは、まるつきり知らなかつたわけではない。朝井あさいさんが、ともだちと美術展びじゆてんをひらくという話はなは、いままで、なんべんもきいている。けれど、そのたびにお金かねのつごうがつかなくて、だめになつていたので、こんどもまたかと思つていたので。

「よかったね。安やすい会場かいじちみつかつたの？」

「安やすいはよけいだ。葵あおいストアだよ。」

「へえ、あんなところ。」

葵あおいストアというのは、商店街しょうてんがいにあるスーパー・マーケットだ。

「またも、口くちをすべらせたら、

「会場かいじちなんか、どこだろうと関係かんけいない。われわれはお客きやくさんに作品さくひん

を見てもらうのであって、会場かいじちうを見てもらうわけじゃないんだ。」

「ごめん、ごめん。」

ぼくは、くびをすくめた。

たしかに朝井あさいさんのいうとおりだ。だけど、あのごみごみした店みせの、どこに絵えをかざる場所ばしょがあったのかな。もちろん、ホールなんて気のきいたものはないはずだ。まあ、とにかく行ってみることにした。

ところが、葵あおいストアにでかけてみて、びっくりした。

どこを見まわしても、美術展びじゆつてんらしいものはない。変へんだと思おもっていると、なんと、二階かいへあがる階段かいだんのかべに、十数点すうてんの油絵あぶらえが、きゆうくつそうにならんでいるではないか。

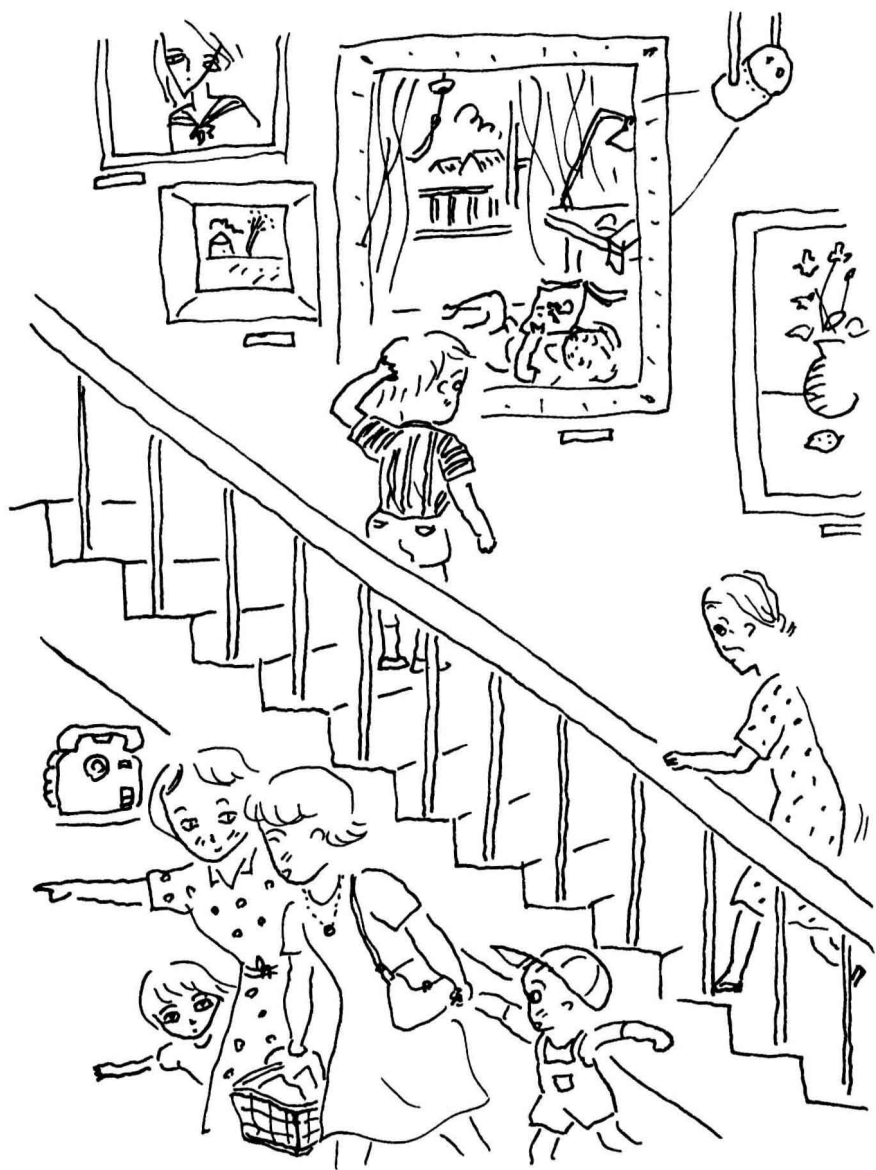
だが、あいにく、きょうは月に一度ひとのバーゲンセールなので、お

客さんは、目ぼしい品物をさがすのにむちゆうで、美術展のほうな
ど、見むきもしない。これでは、せつかくの作品がかわいそうだ。
朝井さんの絵はどれかな、と見まわすうちに、

「あれ、やったな。」

ぼくは、またびつくりした。ひとりの男の子が、たたみの上でひ
つくりかえり、まんが本を読んでいる絵が出ている。見たことのあ
る顔だと思つたら、どうやらぼくらしい。いつも、ちらかしたばな
しの机の上といい、軒にさがったふうりんといい、ぼくの部屋にま
ちがいない。いつのまにスケッチされたのか、ゆだんもすきもあり
やあしない。

暑くるしい夏の一日をもてあましている、ぎょうぎのわるいぼく
のすがたは、「いこい」という題名にびつたりだと思つたが、これでは、
ぼくのなまけぶりを、みんなに見せびらかすようなものだ。



「よし、うんとモデル代だいせしめてやるからな。」

そう思おもったときだ。

いつのまにか、ぼくのとなりに立たっていた、ひとりのおばあさん
が、

「おや、ぼうやをかいいたんだね。」

と、ぼくの顔かほと、絵えを見みくらべながら、いった。

「なるほど、よく似にてる。うまいものね。」

ぼくは、はずかしくなった。

「そんなに、似にてるかなあ。」

「似にてますとも。そっくりよ。どなたがかいたのかね。」

「ぼくの家いえの二階かいにいる、絵えかきさんだけど。」

「ほうっ、そうなの。」

とたんに、おばあさんの目めがかがやいた。

「この人、たのめば、だれの顔でもかいてくれるかしら。」

「そりゃあ……。」

いいかけて、ぼくはあとの声をのみこんだ。日ごろの朝井さんのことを、思い出したからだ。

そうだ。朝井さんのことを紹介しなくてはならない。

ぼくの家は、東京といっても、都心からはほど遠い、北の郊外にある。むかしは大根の名産地だったそうだが、いまは、すっかり町らしくなつて、そんなおもかげはどこにもない。そこで、「西川」というたばこ屋をやっているが、二年前、ねえさんがおよめにいつて、二階の部屋があいた。あけておくのももつたいないと、お父さんが貸間のふだをだしたところ、やってきたのが朝井さんだった。

朝井さんは、今年二十八歳の絵かきさんだが、年より二つ三つ上に見えるのは、ぶしようひげのせいかもしれない。まだ、油絵だけ

では生活せいかつができないので、ときどき繁華街はんかがいにでかけて、通行人つうこうじんの似顔がおえ絵えをかいて暮くらしている。このおばあさんの話はなしには、大よろこびするにちがいないが、はたして、おばあさんの気きにいる絵えができるかどうか。

朝井あさいさんの似顔にがおえ絵えは、実は、お客きやくさんにあまり評判ひやうばんがよくないのだ。お金かねをはらうからには、だれだって、きれいにかいてもらいたいにきまつている。少すこしくらい似にていなくたって、そのほうがよっこぶだろう。でも、朝井あさいさんにはそれができない。

「ぼくの似顔にがおえ絵えを、安やすっぽい修しゆ整せい写せい真しんなんかと、いつしよくたにしてもらつてはこまる。ぼくは、この目にうつる、ほんとうの、生いきた人間像にんげんぞうをかいているんだ。それがいやなら、たのまなければいい。」朝井あさいさんは、この信念しんねんをぜったいにまげない。いつかも、そのこととで、よっぱらいと大げんかしたことがある。ぼくには、むずかし